



日本漢文学

大事典



近藤春雄

日本漢文学大事典

近藤春雄 著



明治書院

日本漢文学大事典

© 1985 Haruo Kondo

著 者

近 藤 春 雄

昭和 60 年 3 月 20 日 印刷

昭和 60 年 3 月 25 日 発行

特価 18,000 円

(特価期限60年 9 月30日)

定価 20,000 円

著 者 近 藤 春 雄

発行者 株式会社 明 治 書 院

代表者 三 樹 彰

印刷者 大日本法令印刷株式会社

代表者 田 中 忠

発 行 所 株式会社 明 治 書 院

東京都千代田区神田錦町1-16 郵便番号 101

電話 (03) 292-3741(代) 振替口座東京3-4991番

3591-10174-8305

星共社 製本

序

本書は日本の漢学・漢文学に関する人名・書名・事項・詩文などについて解説したものである。これまでこの方面のものには、僅かに伝記に属するものがあるだけで、しかもそれは江戸時代に限られている。もちろん国文学や国史関係の辞書には伝記以外に及んだものもあるが、それらはみな一部に限られていて、その全般にわたって解説したものに至っては本書が最初である。

本書の編纂は先年出した中国学芸大事典（大修館書店 昭和五三刊）と並行してなされたものであり、従って様式など、みな同じである。両者は車の両輪の如きものであり、相俟つべきものが多い。願わくは併用を得たく思う次第である。

一体、辞書の編纂というものは、なかなか根気のいるもので、簡単にはいかない。近時、出る辞書の、みな多数の学者を動員してなされるのも故あることであるが、しかし全体を見通し、編者の心を通わせるということになると、一人でやる仕事にも、またそれだけの長所があるものである。

解説を平明にすること、最新の資料によって解説すること、そして参考書や参考論文を出来る限り多く紹介するということは、私の最も願うところであり、終始努力したことである。その参考書や参考論文を多く掲載したのに至っては、もちろん本書の不備を補うためではあるが、またそれを求めておられる研究者の多いのを知っていることである。

本書は古い漢学のイメージをぬぐい去ることにつとめ、とりわけ国文学への影響に留意した。というのは国文学には中国の文学や思想の影響が多く、それを解説することは、また国文学研究には欠かせないことであり、大

いに貢献し得ると考えたからである。折から和漢比較文学会なるものも誕生し、活発な活動を始めたが、本書に国文学史や国語学史に登場するものや、比較文学関係の項目を多くとりこんだのは、正にそういうところからである。

本書はまた亡父近藤空の遺志を継ぐものである。昭和十一年（一九三六）十二月、支那学芸大辞彙を出した父は、時に五十三歳。直ちに日本漢学大辞典を計画し、ようやく人名編を脱稿して書店に送ったが、不幸戦災に遭って、今は僅かに資料の一部をのこすだけである。当時のことは今も忘れ難く、私がこの書の編纂に志したのも、一つにはそういうところからである。

もともと強健などとは言えない私ではあるが、本年はもう古稀を過ぎて早くも一年、今こうして本書をまとめることの出来たのは、何とも嬉しく、また幸なことである。この上はただ多少なりとも学界に益するところがあればと願うばかりである。

終わりに本書の出版を心よく引き受けて下さった明治書院社長三樹彰氏をはじめ、何かとご配慮いただいた企画編集部の藪上信吾氏に感謝の意を表したい。

昭和六十年二月二十日 生誕の日

近藤 春雄

凡例

一、本書は我が国の漢学・漢文学関係の人名・書名・事項・詩文・比較文学について解説したものである。

二、項目の配列は現代仮名遣いによる五十音順とし、同音のものは、その漢字の画数順とし、濁音のまじるものがある場合は、正音だけのものを先としている。

三、解説文は原則として常用漢字・現代仮名遣いにより、難読の漢字には必要に応じて、その字の下の（ ）内に振り仮名を付している。

四、解説文中の中国の人名・書名などについての説明は、すべて中国学芸大事典（拙著、大修館書店、昭和五三刊）の解説にゆずり、本書では行わない。

五、人名の解説は、出身地・名・字・通称・号・事績・生没年・著書の順とし、なお享年は生まれた年を一歳と数える旧来の方式に従っている。

六、人名は故人に限っているが、生存者についても、可能な限り主要著書の終わりに略歴を付している。

七、人名中、江戸時代については号を主としているが、それは藤原惺窩・林羅山など号で呼ぶことが多く、その方が分かりやすいからである。

八、書名の解説は、編著者・書店・発行年月・内容の順とし、その書は日本人の手になるものに限って、翻訳を含んでいる。

九、書名中、人名と同じものがある場合は、別に項目をたて、人名を先にして書名には「書名。」と記して区別している。

一〇、事項は、学会・学派・吟社・文会・図書館・文庫・藩校・書誌・名数などに関するものをはじめ、広範囲にわたり、各時代の漢学史・漢文学史にも及んでいる。

一一、詩文は、詩については題名と詩句、文については題名だけを収めている。題名には全詩・全文を引いているが、文については引かないものがある。

一二、詩文には、すべて返り点・送り仮名を付しているが、解釈はせず、ただ〔参考〕に参考すべきものを挙げている。

一三、比較文学は、国文学中、中国の思想・文学の影響のいちじるしいものや、それをテーマにした単行本を収めている。

一四、〔参考〕は、その項目に関係のある著作を広く集めたもので、配列には順序がない。なお著作の発行年月に、明・大・昭とあるのは、それぞれ明治・大正・昭和の略である。

一五、〔部類別索引〕は全項目（約六三〇〇）を人名・書名・事項・詩文・比較文学に分類して検索の便をはかったもので、それぞれの配列は五十音順によっている。

一六、〔付録〕は日本漢文学年表・江戸時代漢学者生没年表・日本年号索引・中国年号索引・四声韻目表・平声韻字概覧・平仄便覧・主要藩校一覧・国名都道府県名対照地図から成っている。

①日本漢文学年表は、我が国の漢学・漢文学研究に参考になることを年表にしたもので、事項・書名・人名（生没）の順に記している。なお、参考欄には年表の参考になる日本・中国のことを載せている。

②江戸時代漢学者生没年表は、主要な漢学者の在世期間や同時期の生存者が一目で分かるようにと作成したものである。

③四声韻目表・平声韻字概覧・平仄便覧は、近藤本著の支那学芸大辞集（立命館出版部、昭和一一刊）所載のものに手を加えて転載したもので、主として作詩家の要望にこたえたものである。なお、これにはすべて正字と旧仮名遣いを用いている。

④主要藩校一覧は、主要藩校を地方別に並べたもので、藩校名は原則として創設時のものを挙げている。

あ

あいざわがく『会沢学』 水戸学の別称。会沢正志斎は多くの水戸学者中、最も著述が多く、水戸学の何たるかを世人に知らせた功績者であるところからいう。

あいざわせいしさい『会沢正志斎』 一六二一—一六三三。江戸時代、常陸（茨城県）の人。名は安。字は伯民。

通称は恒蔵。号は正志斎・欣賞斎・憩斎。幼時から学を好んで、藤田幽谷に師事した。彰考館の写学生となり、文政六年（一八三三）彰考館総裁代役となり、郡奉行を経て天保二年（一八三一）彰考館総裁となった。外艦が近海に出入するときにあたって、文政八年（一八二五）、新論二巻を書いて、四海万国の大勢を論じ、天下の大計を立てて当世の急務を痛論した。また藩校を創設して学制の改革を行うべきことを斉昭に建言し、天保九年（一八三八）藤田東湖らと協力して弘道館記を作り、嘉永六年（一八三三）弘道館教授頭取となった。文久三年七月十四日没、年八十二。著に孝経考一卷・刪詩義一卷・典謨述義五巻・読周官三巻・中庸釈義一卷・読直隸靈一卷・学制略説一卷・新論二巻・洙泗教学解一卷・草偃和言一卷・及門遺範一卷・退食問話一卷・下学適言七巻・読級長戸風一卷・豈好弁一卷・読葛花一卷・読万我能比礼一卷・稽古雜録一卷・閑聖漫録一卷・正志斎文稿四巻・正志斎遺書十一巻・正志斎詩稿八巻などがある。（近世先哲叢談正編・事実文編六二・近世

漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覧・漢学者伝記集成）

【参考】○会沢正志斎 高須芳次郎（厚生閣、昭17）

○会沢正志斎の思想 塚本勝義（昭和図書株式会社、昭18）

○会沢正志斎の「及門遺範」について—否定の論理とナショナルリズム— 今中寛司（文化史学三五、昭54）

○会沢正志斎 田中佩刀（朱子学大系一四、日本の朱子学）

○会沢正志斎・藤田東湖 原田種成（叢書日本の思想家三六巻、明德出版社、昭56）

○会沢正志斎における儒教経伝の研究 今井宇三郎（日本漢文学史論考、岩波書店、昭49）

あいざわせいしさいしゅう『会沢正志斎集』 高須芳次郎編の水戸学全集（日東書院、昭和八）の第二編所収。新論・下学適言・迪彝篇・読直隸靈を収めている。なお、大日本思想全集第十七巻（昭和六）にも会沢正志斎集を付載しているが、これには新論だけを収めている。

あいざわなんじょう『藍沢南城』 一七二一—一七六〇。江戸時代、越後（新潟県）の人。名は祇。字は子敬。通称は丈助（要助）。号は南城。片山兼山に師事し、講説を業とした。安政七年三月没、年六十九。著に五経一得鈔説五巻・古文尚書略解二十八巻・周易索隠十一巻・春秋講義七巻・礼記講義八巻・三百篇原意十八巻・論語集解補証十巻・論語私説六巻・論語私定説四巻・孟子考七巻・孟子趙註補証七巻・孝経考二巻・経伝愚得二巻・荀子定義・読国語二巻・読書敏求記四巻・読文選八巻・唐宋絶句抄一卷・中晚唐七絶抄略解二巻・過庭奇談一卷・啜茗談柄一卷・三余割記二巻・秘鑑五巻・水戸史館珍書考一卷・徳川御祖先戦功録一卷・南城集一卷・南城三余集二巻・三余集十六巻・雑

録一卷がある。（近世漢学者著述目録大成・近代著述目録後編・越佐名家著述目録・北越詩話）

あいざわやすし『会沢安』 ↓あいざわせいしさい（会沢正志斎）

あいじつさいずいひつ『愛日斎隨筆』 五巻。江戸時代の古屋愛日斎の著。論語の注釈書で、篇を追うて章ごとに諸家の説を挙げ、また自家の説を加えている。寛政六年（一七九四）春の、堀大簡らの序がある。

あいじつろう『愛日楼』 佐藤一斎の号。

あいじつろうぜんしゅう『愛日楼全集』 五十六巻。江戸時代の佐藤一斎の漢詩文集を集めたもので、寛政五年（一七九三）から安政三年（一八五二）までの作を収めている。東京都立中央図書館河田文庫に写本を蔵している。↓あいじつろうぶんし（愛日楼文詩）

あいじつろうぶんし『愛日楼文詩』 四巻。江戸時代の佐藤一斎の詩文集。文三巻、詩一卷から成り、詩文合せて三百二十九首、第四巻の付録として日光山記を収めている。愛日楼全集所収の漢詩文から選んで、片岡遜斎が編刊したもの。文政十二年（一八三〇）九月の林述斎の序がある。なお、昭和五十五年（一九四〇）文化書房博文館発行の田中佩刀解説の縮印版愛日楼文詩（B5判、一五〇頁）がある。

あいせいかんひつご『愛静館筆語』 大和の雙儒谷三山と森田節斎との筆談録。弘化四年（一八二一）四月、節斎は京都から郷里の大和五条へ帰る途中、たまたま高取藩の老臣築山基五左衛門の家にたちより、その愛静館楼上において谷三山と会談した。三山は全璧のため、会談はおのずから筆談となったが、それを記録したのが、愛静館筆語一輯二輯と二家筆談上下および筆語拾遺である。筆語の内容は経史および詩文の論評と

和漢諸儒の品隋とを主としている。奈良県高市郡教育会発行の三山谷先生遺稿にこれを登載している。

【参考】○愛静館筆語につきて 山田勝美（斯文二三一七、昭16・7）

あいちけんいじんでん 【愛知県偉人伝】 十二冊。

手島益雄の著。東京芸備社発行。(1)愛知県俳人伝、(2)同武將伝、(3)同儒者伝、(4)同歌人伝、(5)同画家伝、(6)同勤王家伝、(7)同高僧伝、(8)同城主伝、(9)同工芸家伝、(10)同婦人伝、(11)同医人伝、(12)同芸術家伝から成っている。

あいちけんじゅしやでん 【愛知県儒者伝】 手島益雄の著。東京芸備社発行の愛知県偉人伝所収。

あいのうししょう 【鑑囊抄】 七巻。僧行替の著と伝えられる。和漢の故事、国字漢字の義理、言語起源など五百三十六項について説明している。種々の雑事を混合記述しているのでその名がある。文安三年（1446）作、正保三年（1620）刊。日本古典全集所収。なお、慶長十六年（1611）の写本の複製を古辞書叢刊に収めている。

【参考】○鑑囊抄と太平記 高橋貞一（国語と国文学、昭34・8）

あいはらそうなん 【合原窓南】 一六三—一七七。江戸時代の人。名は余修。初名、草野権八。号は窓南。筑後（福岡県）三潞郡安武村に生まれ、十一歳で僧となったが、数年して還俗し、京都に出て浅見綱斎の門に入り、山崎派朱子学を研修し、合原の姓を名乗った。

宝永（一七〇四—一七二二）中、久留米藩の儒臣となり、のち致仕して退いたが、享保（一七〇六—一七三六）中、また仕えて七代藩主頼徳の侍講となった。易理に詳しく、経世の才があった。元文二年八月二十日没、年七十五。著

に四書資講四巻・論語朝聞道章講義一卷・太極図説資講・初学筌要・讀書録類纂・古語仮字講義・鬼神論・魂魄論・久留米城之記がある。（久留米市誌・近世漢学者著述目録大成）

あおききんそん 【青木錦村】 一六七—一七四。江戸時代、高崎の人。名は先孝。字は思孝。号は錦村。祖父は高崎藩士。江戸に出て寺門静軒（江戸繁昌記の著者）に師事し、業成つて西遊東征したが、安政四年（1832）浅草に塾を開いて講説に従った。高崎藩校文武館が開設されるに及び、明治二年（1869）、藩学助教となり、また歴史修撰に補せられた。明治七年五月十五日没、年五十八。著に西征詩鈔一卷がある。（上野人物志下・群馬県史三・近世漢学者著述目録大成）

あおきこんよう 【青木昆陽】 一六九—一七六。江戸時代、江戸日本橋の人。名は教書。字は厚甫。通称は文蔵。号は昆陽。甘藷先生。京都で伊藤東涯に学び、実学を旨とした。享保五年（1720）ごろ江戸に帰って教授した。町奉行大岡忠相の知遇を得て官庫書籍の閲覧を許され、元文四年（1739）書物方に起用されて図書

の採訪に従事し、のち明和四年（1767）書物奉行となった。その間、元文五年（1740）徳川吉宗の命によって蘭学を学び、江戸における蘭学研究の端緒を為した。また甘藷を救荒の食物とすべしとして、その栽培を奨励したところから、甘藷先生の名があり、蕃薯考一卷が有名である。元禄十一年生、明和六年十月十二日没、年七十二。東京目黒の竜泉寺に墓がある。著に昆陽漫録六巻・同統録附補二巻・昆陽漫録図式・昆陽雜集一卷・草廬雜談正統三巻・経済纂要前集十二巻・同後集五巻・同統集三巻・一夕話一卷・統一夕話一卷・秋夜談一卷・夜話小録一卷・和蘭訳語一卷・同後集一卷・

和蘭文字略考三巻・和蘭勸酒歌解一卷・職原抄注四巻・明官略記一卷・官職略記十三巻・郡名考一卷・対客夜話一卷・答問小録二巻・蕃薯考一卷・甘藷記一卷・蕃薯起立一卷・長崎聞書一卷・刑法国字訳十二巻・国家食貨略一卷などがある。（近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覧・近代名家著述目録・国書解題・先哲叢談）

【参考】○青木昆陽伝 猪股延太郎（昭2）○青木昆陽伝補訂 新村出（続南蛮伝記、大14）

あおきせいじょう 【青木青城】 一八四—一八七。江戸時代、越後（新潟県）の人。名は茲。字は邦光・吉夫。通称は三之丞。号は青城・蘭村。新発田藩儒、青木弘安の子。初め家学を受けたが、のち大阪に出て藤沢東咳の門に入り、但徠学を学んだ。ついで江戸に出て昌平学派の藤森弘庵・川田薺江に学んだ。新発田藩に仕えたが、明治二年（1869）村松藩に仕えて藩校教授となった。その学は経史百家に通じ、子弟に尊王の大義を教え、詩文を善くした。明治三年十月没、年四十七。著に青城遺稿がある。（北越詩話下・近世越佐人物伝巻六・近世漢学者著述目録大成）

【参考】○北越の儒者青木青城（付、父弘安、弟海嶠）の人物事蹟 沢口剛雄（斯文四一、昭39・1）

あおきとうあん 【青木東庵】 一六五—一七〇。江戸時代、京都の人。名は澄。字は元澄。号は東庵・松岳・竹雨斎。本姓は余。韓国余章王の遠裔。木下順庵に学び程朱を宗とした。また雑家小説などにも通じ、また医を善くした。豊後杵築藩儒となった。元禄十三年九月十二日没、年五十一。著に竹雨斎詩集五巻がある。（近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覧）

あおきまさる 【青木正兒】 一八七—一九四。山口県下

関の人。号は迷陽。第五高等学校から京都帝国大学文科大学に進んで、中国文学を専攻し、明治四十四年(一九一三)卒。大正十二年(一九二二)新設の東北帝国大学法文学部助教授となり、その後、京都帝国大学教授・山口大学教授を歴任し、昭和三十二年(一九五七)京都に退居した。この間、昭和二十八年(一九五三)日本学士院会員となった。文学博士。明治二十年二月十四日生、昭和三十一年十一月二日没。著に金冬心之芸術・支那文芸論叢・支那近世戯曲史・支那文学概論・元人雜劇序説・江南春・支那文学芸術考・支那文学思想史・抱朴酒話・中華文人画談・華国風味・清代文学評論史・元人雜劇・新訳楚辭などがあり、青木正児全集十巻がある。

〔参考〕○青木正児博士の業績大要 吉川幸次郎(東方学三一、昭四一・一一) ○青木正児博士年譜及び著作目録(立命館文学二四五、昭四〇・一一) ○青木迷陽博士を憶う 橋本循(立命館文学二四五、昭四〇・一一)

あおきまさるせんしゅう 『青木正児全集』 十巻。

橋本循・吉川幸次郎・小川環樹・中田勇次郎・高木正一の編。昭和五十八年(一九八三)九月以降、春秋社発行。菊判、平均五五〇頁。昭和四十四年(一九六九)に刊行したものの復刊で、各巻の内容は次の通り。第一巻Ⅱ支那文学思想史・支那文学概説・清代文学評論史(解説、橋本循)。第二巻Ⅱ支那文芸論叢・支那文学芸術考(解説、小川環樹)。第三巻Ⅱ支那近世戯曲史(解説、入矢義高)。第四巻Ⅱ新訳楚辭・元人雜劇序説・元人雜劇(解説、田中謙二)。第五巻Ⅱ李白(解説、上村幸次)。第六巻Ⅱ金冬心之芸術・中華文人画談・歴代画論・鉄斎書讀釈文(解説、中田勇次郎)。第七巻Ⅱ江南春・琴棋書画・雜纂(解説、吉川幸次郎)。第八

巻Ⅱ中華名物考・中華茶書・隨園食單(解説、水谷真成)。第九巻Ⅱ酒中趣・中華飲酒詩選・華国風味(解説、高木正一)。第十巻Ⅱ芥子園画伝(訳)(解説、神田喜一郎)。

あおきめいよう 『青木迷陽』 ↓あおきまさる(青木正児)

あおちけんざん 『青地兼山』 一七三―一七六。江戸時代、加賀(石川県)の人。名は齊賢。字は伯孜。通称は弥四郎・藏人。号は兼山・讓水。金沢藩士定政の子。初め羽黒養潜について蘭斎派朱子学を修め、のち室鳩巢に師事して、鳩巢門七才子の一に数えられている。加賀藩に仕えた。享保十三年没、年五十七。著に兼山麗沢秘策八巻がある。(石川県史・燕台風雅・近世漢学者著述目録大成)

あおちしゅんしんざい 『青地浚新斎』 一六三―一七〇。江戸時代、加賀(石川県)の人。名は礼幹。字は貞叔。通称は藤大夫。号は浚新斎・仁智楼。金沢藩士定政の子。初め兄の兼山と共に羽黒養潜に師事し、のち室鳩巢について経史を修めた。詩文を善くし、兄の兼山と共に兼山麗沢秘策八巻を編した。延享元年没、年七十。著に浚新文集三巻がある。(石川県史・燕台風雅・近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覧)

あおちじんちろう 『青地仁智楼』 ↓あおちしゅんしんざい(青地浚新斎)

あおばなんしゅう 『青葉南洲』 一七〇三―一七二三。江戸時代、讃岐(香川県)の人。名は士弘。字は道遠。通称は弁之助。号は南洲・翠竹楼。高松藩士青葉直行の子。十三歳から藩儒根本弥右衛門および雨森三哲について学び、のち享保八年(一七三三)江戸に出て昌平黉に

入り、林鳳岡に学び、また室鳩巢に易学を受けた。享保十一年(一七三六)高松三代藩主頼豊に仕えて儒員となり、延享四年(一七五七)記録所総裁となり、明和八年(一七七二)致仕した。詩・書を善くした。安永元年没、年七十。著に雞窓私言一卷・帝王紀略三巻・訓蒙要術一卷・きりの記二巻がある。(讃岐人物伝・日本教育史資料巻七・讃岐人名辞書・高松市史・近世漢学者著述目録大成)

あおやまうんりゅう 『青山雲竜』 ↓あおやませっさい(青山拙斎)

あおやまえんう 『青山延于』 ↓あおやませっさい(青山拙斎)

あおやませっさい 『青山拙斎』 一七六一―一八三〇。江戸時代、水戸の人。名は延于(えんご)。字は子世。通称は量介。号は雲竜・拙斎。世々水戸藩に仕え、藩儒青山瑤

溪の子。業を立原翠軒に受けて、力を文章に専らにし、細井平洲・山本北山などの折衷学派の学者と交わった。当時、水戸藩では高橋坦室・藤田幽谷・川口緑野などが出て文学が興隆したが、中でも文辞に至っては拙斎が秀でていた。寛政六年(一七九四)彰考館に入って国史の編修に当たり、文政六年(一八二四)四十八歳で総裁となった。天保九年(一八三八)、藩校弘道館が創設せられると教授頭取に任ぜられ、学政に参画した。その撰述になる皇朝史略十二巻(文政九年刊)・統皇朝史略五巻は諸藩に普及して藩校の教科書ともなり、国民的自覚を促して明治維新にも影響するところがあった。長子延光(のぶ)もすぐれて、弘道館総裁となった。天保十四年九月六日没、年六十八。著に東藩文獻志三十六巻・皇朝史略十二巻・統皇朝史略五巻・文苑遺談三巻・文苑遺談続集一卷・明徴録十巻・国史稿五十巻・

国史補遺一巻・武公遺事一冊・伐柯録二巻・詞林摘英六巻・左伝杜註正誤三巻・文昌堂雜録八巻・拙斎小集四巻・拙斎文集十二巻・拙斎隨筆二巻がある。(文苑遺談・事実文編五九・近世先哲叢談正編・古今水戸名家集・水戸文籍考・近代著述目録後編・近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覧・漢学者伝記集成)

あおやまてっそうさい

『青山鉄槍斎』

(一八三〇—

一八六六) 江戸末・明治時代、水戸の人。名は延寿。字は季卿。通称は量四郎。号は鉄槍斎。青山拙斎の末子。家学を受け、また藤田東湖に師事した。水戸藩に仕えて弘道館の訓導となり、彰考館に入った。明治三十九年十一月没、年八十七。著に皇朝金鑑二十二巻・戰略新編十二巻・統史雜咏二巻附録一巻・英哲年輪便覧一巻・大八洲遊記十三巻・常北遊記一巻・鉄槍斎文鈔七巻・鉄槍斎詩鈔五巻・統大八洲遊記六巻・桜花百絶一巻・画題百絶一巻・塩原百絶一巻・登岳唱和一巻・読史偶筆二巻などがある。(近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覧・水戸文籍考)

あおやまのぶみつ

『青山延光』

↓あおやまはいげんさい

『青山佩弦斎』

あおやまのぶゆき

『青山延子』 ↓あおやませつさい

『青山拙斎』

あおやまはいげんさい

『青山佩弦斎』

(一八六一—

一八七二) 江戸時代、水戸の人。名は延光(光)。字は伯卿。通称は量太郎。号は佩弦斎・晩翠・春夢居士。水戸藩儒青山拙斎の長子。家学を受けて詩文に長じ、史学に通じた。文政七年(一八二四)水戸藩に仕えて彰考館に入り、修史のことに従った。九代藩主斉昭の信任が厚くて天保元年(一八三〇)総裁代役に進んだ。また天保十一年(一八三九)弘道館頭取となって一藩の教育を総覧した。

弘道館に教授しながら、大日本史の校刊にあたり、功績を挙げた。致仕して春夢と称し、明治維新後は政府に出仕して大学中博士に任ぜられた。明治四年没、年六十四。著に国史紀事本末四十巻・統国史紀事本末三十二巻・野史纂略五巻・豊臣四将伝一巻・六雄八将論一巻・征韓雜志一巻・題画百二十詠一巻・小早川隆景卿伝一巻・赤穂四十七士伝一巻・義人遺草一巻・名花有聲画一巻・桜史新編一巻・酒史新編二巻・佩弦斎文集九巻・佩弦斎別集六巻・佩弦斎外集三巻・佩弦斎日記及書簡集三巻・佩弦斎漫鈔一巻・史話一巻などがある。(文苑遺談・近世先哲叢談正編・彰考館総裁略伝・近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覧・水戸文籍考)

あかいつかうかい

『赤井東海』

(一七七一—一八六三) 江戸時代、讃岐(香川県)の人。名は綱。字は士巽。通称は秀之助・巖三。号は東海。家は高松藩士。江戸に出て昌平黌に入り、古賀精里に従った。研学五年、文化十年(一八三三)昌平黌を辞して塾を開いた。時に二十五歳。文政十二年(一八二九)高松藩に仕えて江戸詰儒員となり、世子に侍読した。その学は朱子学を宗としたが、渡辺華山・高野長英などと交わり、進歩的開化思想を持っていた。文久二年十一月十四日没、年七十六。著に四書質疑十二巻・学庸質疑二巻・論孟序説一巻・春秋質疑四巻・読史質疑八巻・晏子略解三巻・戦国策遺考六巻・甲乙問答十五巻・東海文鈔六巻・東海詩鈔四巻・槐窓漫筆一巻・蕉窓漫筆一巻・竹窓漫筆一巻・海防論二巻がある。(讃岐人名辞書・高松市史・事実文編六四・近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覧)

あかざきかいもん

『赤崎海門』

(一七三二—一八〇五) 江戸

時代、薩摩(鹿児島県)の人。名は楨幹。字は彦礼。元礼。通称は源助。号は海門・尚友軒。家は鹿児島郡谷山の郷土。藩の儒者山田月洲に朱子学を学び、のち肥後(熊本県)に赴いて藪孤山に従学した。朱子学を遵守して詩文に長じ、薩摩藩に仕えて、造士館の二代教授となった。晩年柴野栗山に認められて、頼春水らと共に昌平黌の講官に挙げられ、寛政十二年(一八〇〇)十二月から享和二年(一八〇三)三月にかけて三十七回講じた。文化二年没、年六十四(一説に一七九一—一八〇三。享和二年八月二十九日没)。著に講学紀聞四巻・琉客談記一巻・中山入貢記一巻・東遊日記一巻・芋山筆記二巻・村雨の夕一巻・古の風一巻がある。(日本教育史資料巻一九・鹿児島県史・鑑定便覧・近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覧)

『参考』

○赤崎海門 加藤雄吉(めざまし草五六、明35)

○薩摩の学風 西村天因(日本宋学史、明42)

あかざわいちどう

『赤沢一堂』

(一七六一—一八四七) 江戸時代、讃岐(香川県)の人。名は一。万。字は太乙。号は一堂。弘化四年六月五日没、年五十二。著に詩律一巻・四書集注講義四巻・詩経講義八巻・孝経講義一巻・左伝講義五巻・孫子算注二巻・聖学百問二巻・三代字彙二巻・逸語二十巻・雞肋集・婦孺集・盛於集一巻・文壇一叱一巻・剪綵花叢一巻・反故紙囊五巻・竜威秘録二十四巻・時日異名考一巻・茶故事二巻・歴代度量衡考三巻・傷寒論甘露味四巻・傷寒論醍醐味五巻・傷寒論狐白裘一巻・傷寒論脈說金不換一巻・金匱要略は正四巻・升古事医言五巻・古今蘊秘録五巻・訳小倉百首五巻・爵祿考一巻・心事詩一巻・碧巖聯珠二巻・三称一巻・十教論一巻がある。(近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覧・儒学源流)

あかだかぎゅう 『赤田臥牛』 一七〇一—一六三。江戸時代、飛騨（岐阜県）の人。名は元義。字は伯宜。通称は新助。号は臥牛。家は酒造を業とした。經史諸子を独修したが、津野滄洲に詩を学んで、徂徠の学風を慕い、護國風の詩を好んだ。江村北海にも学んだ。文政五年七月二十二日没、年七十六。著に臥牛集十卷（文化一〇—一八三）刊）がある。（濃飛偉人伝・近世漢学者著述目録大成）

あかつかきよし 『赤塚忠』 一九三—一九〇。茨城県の出身。東京大学支那哲学科卒。東京大学教授、二松学舎大学教授を歴任。中国古代文化史の専攻で、甲骨文や金文を利用した中国古代の社会の研究や中国思想史研究に業績がある。文学博士。昭和五十八年十一月二十八日没、年七十一。著に中国古代の宗教と文化—殷代の祭祀（角川書店）・易经（明德出版社）などがある。

あかつきにみるせんべいのたいがをようするを 『眺見千兵衛三大牙』 じふしきあんきざんをうつのすにだいす（題不識庵撃機山二図と）

あかまつこう 『赤松鴻』 じあかまつそうしゅう（赤松滄洲）

あかまつすんうん 『赤松寸雲』 一八二—一八六。江戸時代、美作（岡山県）の人。名は元。字は季吉。通称は元四郎。号は寸雲。津山藩儒福垣雪洞に從学し、のち江戸に出て古賀侗庵・堀谷宕陰などについて研修した。のち仙台藩に招かれたが、明治二年（一八六九）津山藩に移り、藩校学問所の文学教授となった。鹿藩後は中学校・師範学校の教諭を歴任した。門下に平沼麒一郎がある。明治十二年十月二日没、年六十三。著に皇国三字経・青砥藤綱論がある。（日本教育史資料巻

九・仙台人名辞典・岡山県人物伝・近世漢学者著述目録大成）

あかまつそうしゅう 『赤松滄洲』 一七三—一八〇。江戸時代、播磨（兵庫県）の人。名は鴻。字は国鸞。通称は良平。号は滄洲・静思翁。本姓は舟曳氏。赤穂の医師大川耕斎に養われて、大川を名乗ったが、文詞においては赤松と称した。京都に出て、医術を香川修庵に、経義を宇野明霞に学び、延享四年（一七九七）赤穂藩に仕えて儒員となり、家老に進んだ。幕府の異学の禁に反対して、朱子学派の固陋偏狭の弊と護國古文辞派末流の詩文を主として実践躬行を軽んずる風潮を非とし、聖教を崇敬して実践躬行の重んずべきことをとなえた。のち家老にあげられて藩政に参画した。容貌は魁偉で美髯の持ち主であった。寛政十三年一月八日没、年八十一。著に論語省解二卷・読孟子二卷・周易象義十卷・読易備考・周易便覧十卷・尚書独断十卷・講学日抄六卷・一得録・博物強識四卷・疏客談記一卷・赤穂四十六士論一卷・大石良雄自画像記一卷・静思亭文集十卷・静思亭遺稿十卷・静思亭雜著十卷・孔伝孝経一卷（校）・左国映詞八卷がある。（先哲叢談続編・事実文編一二・日本教育史資料巻六・続諸家人物志・近世叢語続編・近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述目録・漢学者伝記集成）

あかまつたいゆ 『赤松太庚』 一七九—一七六。江戸時代、江戸の人。名は弘。字は毅甫。号は太庚・赤草・述斎・木瓜翁。太宰春台に師事して経芸をもって名があり、その学は漢宋を主とせず、一家の言をなした。易・書・詩・春秋・三礼・孝経・論語の注解を作り、九経述と名づけ、百三十卷ある。明和四年四月十二日没、年五十九。著に九経述百三十卷・赤草子前後編・

家語述がある。（漢学者伝記集成・漢学者伝記及著述集覧・近世漢学者著述目録大成）

あかまつらんしつ 『赤松蘭室』 一八四—一七九。江戸時代、播磨（兵庫県）の人。名は敷。字は大業。通称は太郎兵衛。号は蘭室。赤穂藩儒赤松滄洲の子。家学を受けて詩文に長じた。赤穂藩に仕えて、博文館の督学・祭酒となり、また家塾にあって諸生に教授した。寛政九年三月六日没、年五十五。著に赤城文獻志・赤城風雅集七卷・義士逸話二卷・東坡文鈔四卷（校）・弊帚筆記六卷・蘭室詩文集二十卷・王柏書疑九卷（校）がある。（日本教育史資料巻一二・近世叢語続編・続諸家人物志・近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覧）

あかんぶん 『亜漢文』 漢学専用の文章であるが、実用を主とするため漢文の枠からはみ出て日本化したものをいう。変体漢文・和化漢文・和臭漢文ともいい、鎌倉幕府の記録である吾妻鏡はその代表的な作品である。↓へんたいかんぶん（変体漢文）

〔参考〕○変体漢文研究の構想 築島裕（東京大学人文科学紀要一三、昭32・8。平安時代の漢文訓読語につきての研究所収）○今昔物語集に於ける変体漢文の影響について 峰岸明（国語学三六、昭34・3）○平安時代の記録体の文章の性格試験 遠藤好英（文芸研究六四、昭45・6）

あきたじんぶつでん 『秋田人物伝』 三卷一冊。山方旭嶺の著。大正十二年（一九二三）三月、尚志堂発行。秋田県内における慶長（一五九六—一六四三）以降、明治（一八六八—一九一三）初年に至るまでの偉人傑士四百余人の伝記を叙し、異称別号索引を付している。

あきづきいけん 『秋月草軒』 一八四—一八〇。江戸時

代の人。名は胤永。字は子錫。通称は悌次郎。号は韋軒。会津藩士。天保十三年（一八四二）十九歳で江戸に遊学し、弘化三年（一八四三）二十三歳のとき昌平黌に入學し、佐藤一斎に学んだ。のち会津に帰ったが、文久二年（一八六二）藩主松平容保が京都守護職となって上京するに及び、従って上京し、機密に参画した。慶応元年（一八六五）蝦夷（参）の代官となり、三年命によって帰ったが、明治元年（一八六八）正月鳥羽伏見の戦（戊辰戦争）に転戦して禁錮の厄に会った。明治五年（一八七二）特赦にあい、左院少議生となり、五等議官に進み、のち太政官・東京大学予備門・第一高等学校に歴任して、明治二十四年（一八九一）加納治五郎が熊本第五高等学校長となるに及んで、招かれて赴任した。二十八年（一九〇七）退官し、明治三十三年一月五日没。年七十七。経史に通じて程朱を宗とし、詩文を善くし、また書に長じた。著に観光集八巻がある。養子に秋月胤継があり、朱子研究（昭和二）がある。昭和二十年（一九四五）没。年七十三。（近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覧）

〔参考〕○秋月韋軒と小泉八雲 鈴木三八男（斯文六六、昭四六・八）

あきづききつもん 【秋月橋門】（一八〇一—一八六〇）江戸時代、豊後（大分県）の人。名は竜。字は伯起。通称は小相。号は橋門。日向（宮崎県）高鍋の浪士秋月逍遙の次男。十六歳のとき日田の広瀬淡窓の門に入り、ついで佐伯に至り、藩儒中島米華の家に寓した。のちまた咸宜園に入り、また亀井昭陽の塾に入って徂徠学を学ぶこと数年に及んだ。二十三歳のとき肥前島原に至って塾を開き、のち備前（岡山県）に至って医を学んだ。天保十四年（一八四三）佐伯藩に仕えて、藩校四教

堂で教えた。その学は朱子・徂徠を論ぜず、その長を採り、詩文および書を善くし、また和歌に長じた。維新後は鎮守府に属し、また弁事となり、葛飾県の知事となった。明治十三年四月二十六日没。年七十二。著に橋門韻語二巻・南留別志考がある。（日本教育史資料巻八、巻一二・大分県偉人伝・近世漢学者著述目録大成）

あきづきてんぼう 【秋月天放】（一八元—一九三）江戸末・明治時代の人。名は新。字は士新。通称は新太郎。号は天放・必山。秋月橋門の子で、家学を継承し、広瀬淡窓に学んだ。詩を善くした。天保十年生、大正二年五月十日没。年七十五。著に天放存稿二巻・知雨楼詩存十巻がある。

あきもとたんえん 【秋元澹園】？—？。江戸時代、下野（栃木県）那須の人。名は以正。字は子帥。通称は喜内。号は澹園・須溪・嶠夷・古毛山人。荻生徂徠に師事して古文辞を学び、詩歌に長じた。岡崎藩儒となった。生没年不詳。宝暦（一七五—一七六〇）中に没した。著に澹園集初稿三巻・澹園集二稿七巻・問槎崎賞三巻・明七才子全伝一卷・関將軍全伝がある。（近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覧）

あきやまがんだん 【秋山巖山】（一七二—一八六三）江戸時代、讃岐（香川県）の人。名は惟恭。字は仲礼。通称は伊豆。号は巖山・如瓶・千別舎。家は世々櫛梨神社の祠官。初め琴平の牧東渚の門に入って和漢の学を修めた。のち頼山陽の門に入り、日本外史稿本を写して帰る、諸生に教えた。天保十年（一八三九）丸亀藩主高朗から、西讃府志編纂の命を藩儒巖山村南里らと共に受けて、その事に従い、安政五年完成した。文久三年四月十日没。年五十七。著に西讃府志・讃岐小史・讃岐

神社考・帝統蒙求・読新論がある。（讃岐人名辞書・丸亀市史・香川県史第二編・国学者伝記集成統編・近世漢学者著述目録大成）

あきやまきよくざん 【秋山玉山】（一七三—一八六三）江戸時代、肥後（熊本県）の人。名は儀。定政。字は子羽。通称は儀右衛門。号は玉山・青柯。熊本藩士中山定勝の子。叔父の秋山需庵の養子となった。藩儒水足屏山に徂徠学を学んだ。二十三歳のとき藩主（宣紀）に従って江戸に赴き、林大学頭鳳岡に師事し、昌平黌に入り、林門に研修すること十年に及んだ。また服部南郭に従って護國の詩文を学んだ。帰藩して藩主の侍読となり、延享五年（一七四八）正月、藩校時習館の開校に当たって初代教授となった。宝暦十三年十二月十一日没。年六十二。著に時習館学規一卷・玉山詩集六巻・玉山遺稿十一巻・墨子全書六巻（校）・韓詩外伝十巻（校）がある。（日本教育史資料巻八、巻一二・先哲叢談・事実文編三八・近世叢語・肥後先哲傳・肥後先哲評伝・肥後文教史・近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覧・漢学者伝記集成）

〔参考〕○秋山玉山 松下忠（江戸時代の詩風詩論三三頁、明治書院、昭四四）○秋山玉山評伝 徳田武（明治大学教養論集九九・一〇八、昭五二・二、52・2）

あきやまけいざん 【秋山景山】（一七五—一八六三）江戸時代、越後（新潟県）の人。名は朋信。字は子交。通称は多門太。号は景山・醉翁。家は長岡藩の世臣。江戸に出て服部白貞（南郭の子）に師事して徂徠学を受け、詩文を修めた。しかしその学は必ずしも師説を固守せず、経済を重んじ、実践運用をもって学の要とした。文政五年（一八二三）藩校崇徳館の教授となり、ついで都講に進んだ。天保十年八月没。年八十二。著に易

解・景山雜著がある。(北越詩話上・近世漢學者著述目録大成)

あきやまはくひどう 『秋山白賁堂』 一七九一—一八七〇

江戸時代、白河(福島県)の人。名は勝鳴・固。字は叔先。通称は五郎吉・五郎治。号は白賁堂・蝸庵・三友・無所為。本姓は鈴木氏。初め広瀬蒙斎に学び、文政三年(一八二〇)白河立教館の学頭となった。文政六年(一八二三)江戸に出て昌平黌に入学し、尾藤二洲などに学んだ。文政十年(一八二七)帰藩して十二代藩主松平定猷および世子定敬の侍講・侍読となり、安政四年(一八五三)桑名立教館の教授となった。明治七年三月一日没、年七十七。著に白賁堂経説一卷・白賁堂文鈔一卷・白賁堂詠藻一卷・白賁堂詩鈔一卷がある。(日本教育史資料巻一一・三重先賢伝・近世漢學者著述目録大成)

あきやまひさい 『秋山罷斎』 一八九一—一九〇一 明治・大正時代の人。名は断・勝機。字は子勿。号は罷斎。蕉窓・蟻山。秋山白賁堂の子。家学を継承して経義を専攻し、実践を重んじた。昭和四年十一月十三日没、年八十一。著に大学論語筆記十七冊・易经本義筆記十五冊・経余割記百三冊・罷斎筆録二十冊・養病日程一冊・古今喪制略一冊・読書話一冊・灯下話余一冊・略占法一冊・中筈法一冊・西上日記一冊・壬午西遊後記一冊がある。(近世漢學者著述目録大成)

【参考】○秋山罷斎先生 糸賀国次郎(山崎闇斎と其門流、明治書房、昭13)

あくたがわぎよくたん 『芥川玉潭』 一七七一—一八四三

江戸時代の人。名は希由。字は子轍。号は玉潭。鮎江藩芥川思堂の次子。父に家学を受け、天明八年(一七八七)、父に従って鮎江に來住し、三十一歳で家職を継いで藩の儒者となった。文化十一年(一八四三)藩校進

徳館を創設するに当たって、学規・学則を定めて大いに功があった。経史に精しく、詩文を善くし、また書道に秀でていた。天保十三年二月二十日没、年五十六。著に玉潭詩文集がある。(若越墓碑めぐり・日本教育史資料巻一二・鮎江郷土史・近世漢學者著述目録大成)

あくたがわたんきゅう 『芥川丹丘』 一七〇一—一七六五

江戸時代、京都の人。名は煥。字は彦章。通称は養軒。号は丹丘。字野明霞に学び、また伊藤東涯・服部南郭に学んだ。学は陽明学を主とし、鮎江藩に仕えて儒臣となった。天明五年六月二十九日没、年七十六。著に丹丘詩話四卷・薔薇館詩集五卷・薔薇館文集十卷・詩家本草二卷・涓子一卷・樵談一卷・漁談一卷・陶談一卷・文家本草一卷・荊廟奉獻詩一卷・名山副三十七卷・杖談一卷・大学臆一卷・中庸臆一卷・周易象解・古易鍵・古易鑑五卷・春秋ト筮解一卷・象山陽明学的二卷・東方輿略十卷・唐詩註解七卷(校)・商子全書四卷(校)・尚書注疏十卷(校)がある。(近世漢學者著述目録大成・漢學者伝記及著述集覽)

あくたがわりゅうのすけとかんぶんがく 『芥川竜之介と漢文学』 芥川竜之介(一八五二—一九二〇)の作品

には中国文学に取材したものが見られる。唐の李復言の統玄怪録中の一編である杜子春の話にとった「杜子春」・枕中記にとった「黄梁夢」が有名であり人口に膾炙しているが、このほか清の蒲松齡の聊斎志異にとったものが四編ある。大正四年(一九一五)七月発表の「仙人」が風戯(巻二)と雨銭(巻一四)に取材し、同五年発表の「酒虫」が、酒虫(巻一四)に取材し、同六年発表の「首の落ちた話」が諸城某甲(巻三)とトルストイの「戦争と平和」第一巻第二編第十九章に取材し、同十一年(一九二二)三月発表の「仙人」が勞山道士

(巻二)に取材しているのがそれである。なお、芥川が聊斎志異を知ったのは国木田独歩の支那奇談集(近事画報社、明治三九・二)によってであるといわれる。以上のほか、大正八年(一九一九)十二月発表の「尾生の信」の史記または莊子によっているのがあるが、支那遊記では中国への関心と造詣の深さを示し、また「漢文漢詩の面白味」と題する一文では「漢詩漢文を読んで利益があるかどうか? 私は利益があると思ふ。…だから漢詩漢文を読むと云ふ事は、過去の日本文学を鑑賞する上にも利益があるだらうし、現在の日本文学を創造する上にも利益があるだらうと思ふ」と言っている解を示し、多数の詩人に言及している。↓とししゅん(杜子春)・しなゆうき(支那遊記)

【参考】○中国の色情小説及び怪異小説と芥川竜之介

―枕中記と芥川の黄梁夢・蒲松齡の酒虫と芥川竜之介の酒虫・蒲松齡の勞山道士と芥川の仙人―大塚繁樹(愛媛大学紀要人文科学七―一、昭36・12) ○芥川竜之介と中国文学 正木栄子(目白学園女子短大研究紀要二二、昭50・12) ○芥川竜之介と中国 佐藤一郎(北斗二―三、昭31・5)

あさいせつけん 『浅井節軒』 一八三一—一八六三 江戸時代、尾張(愛知県)熱田の人。名は雍。字は穆卿。通称は益太郎。号は節軒。医者で、詩文を善くし、尾張藩に仕えた。文久二年没、年四十二。著に聖賢伝・公羊伝補解・穀梁伝補解・忠義録・孝友録・日耕録十卷がある。(近世漢學者著述目録大成・漢學者伝記及著述集覧・名古屋史)

【参考】○浅井節軒 尾張藩に仕えた。文久二年没、年四十二。著に聖賢伝・公羊伝補解・穀梁伝補解・忠義録・孝友録・日耕録十卷がある。(近世漢學者著述目録大成・漢學者伝記及著述集覧・名古屋史)

あさいとなん 『浅井図南』 一七九一—一八六三 江戸時代、京都の人。名は正直。字は維寅。通称は頼母。号は図南・幹亭・篤敬亭。医を業とし、画に長じた。尾張藩

に仕えて医学訓導となった。天明二年八月五日没、年七十七。著に図南文集十巻・告徒録一巻・貽厥録二巻・客遊観花記二巻・扁倉伝割解二巻・砭脇録一巻・腹診法一巻・穴名備考がある。(近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覧・近代著述目録後編)

あさいほうしよ『浅井芳所』?—?。江戸時代、

武蔵の人。名は寛(寛)之。字は子喜。通称は喜蔵。

号は芳所。河口静斎・室鳩巢に師事し、程朱を宗とした。川越藩儒となり、明和(天明一七)中没、生年不詳。著に芳所経説・芳所文集がある。(近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覧)

あさいりょうい『浅井了意』?—?。江戸時代

前期、江戸の人。号は松雲・瓢水子。仮名草子の作者もと武士であったが、のち浪人となり、さらに剃髪した。明暦三年(一六五七)の江戸の大火後は京都の黒谷に住み、仮名草子を書きはじめたが、寛文(二六—二七)中、京都二条大谷派の末寺本性寺照儀坊に住職となった。和漢の学に通じ、作品に東海道名所記・江戸名所記・浮世物語・堪忍記・本朝女鑑・可笑記評判のほか、中国の怪異小説を翻案した伽婢子(およびその続編ともいふべき狗張子(いぬはりことかんぶんがく)の世界に新分野をひらいた。元禄四年正月一日没。八十歳前後といわれる。いぬはりことかんぶんがく(伽婢子と漢文学)・いぬはりことかんぶんがく(狗張子と漢文学)

【参考】○了意怪異の素材と方法 江本裕(早稲田大学近世文芸研究と評論二、昭47・5) ○浅井了意 藤井乙男(江戸文学叢説、岩波書店、昭6)

あさいりんあん『浅井琳庵』(一六三—一七二)。江戸時代、近江(滋賀県)の人。名は重遠。通称は万右衛門。

号は琳庵。山崎闇斎に師事し、岡部侯の儒臣となった。正徳元年没、年六十。著に論語聞耳記・名義詳説・武要抄・興名草一巻がある。(近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覧)

あさかきさい『安積希斎』(一六三—一六六)。江戸時代、

常陸(茨城県)の人。名は貞吉。字は恵吉。通称は介之丞。号は希斎。水戸藩に仕えて、承応(一六五—一六五)中、儒員となり、詩文を善くした。徳川光圀の示唆により浅香を安積に改めた。寛文六年七月十七日没、年三十七。著に希斎詩集二巻・祭礼私考一巻がある。(水戸古今名家集・水戸文籍考・近世漢学者著述目録大成)

あさかごんさい『安積良斎』(一七〇—一七六)。江戸時代、

替代(福島県)安積郡郡山の人。名は重信・信。字は思順。通称は祐助。号は良斎・見山楼。幼時から学を好み、二本松藩儒今泉徳輔・八木敬蔵など数人に従学し、十七歳のとき江戸に出て、佐藤一斎・林述斎に学んだ。文化十一年(一八二四)神田駿河台に塾を開き、四十一歳のとき良斎文略三巻を著すに及んで名声が高くなった。天保七年(一八三六)二本松藩儒となり、同十四年(一八四三)藩校敬学館教授となったが、嘉永四年(一八五二)幕府の儒官となり、昌平黉教授となった。一斎のあとを継いで官学の權威を保ち、文章を善くした。寛政二年三月二日生、万延元年十一月二十一日没、年七十一。著に朱学管窺一巻・荀子略説一巻・論語理註八巻・論孟衍旨六巻・大学略説一巻・中庸略説一巻・史論二巻・烈婦伝一巻・読史偶論四巻・名賢言行略六巻・熙朝名賢言行録六巻・禦戎策二巻・小戎図攷一巻・洋外紀略三巻・良斎文略七巻・同統編三巻・良斎詩略三巻・良斎閑話二巻・同統篇二巻・南柯余編三

巻・南遊雜記一巻・遊豆紀勝一巻・東省日録一巻・東省統録一巻・良斎文集十五巻・良斎文稿一巻・良斎詩稿一巻・見山樓詩集五巻・楽其楽園記一巻・加藤清正伝一巻がある。なお、享年については七十歳説(慶長以来諸家著述目録・近世漢学者著述目録大成・日本史辞典)のほか、寛政二年生、万延元年没(一七—一八)とする七十一歳説(関八州名墓誌・東京市内先儒墓田録)、天明五年生、万延元年没(一六—一七)とする七十六歳説(日本儒学年表・名人忌辰録)がある。

(近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覧・近世先哲叢談統編・近世儒林年表・近世儒林編年志) 【参考】○安積良斎 松下忠(江戸時代の詩風詩論六頁、明治書院、昭44) ○安積良斎 岩橋遵成(近世日本儒学史上巻六頁、東京宝文館、昭2) ○佐藤一斎と安積良斎 富士川英郎(江戸後期の詩人たち、麦書房、昭41) ○安積良斎 井上哲次郎(日本朱子学派之哲学三頁、富山房、明38) ○安積良斎と土佐人寺石正路(南学史三三頁、富山房、昭9) ○教授資料(良斎の没年) 浜野知三郎(斯文二二—二二、昭5・12) ○安積良斎詳伝 石井研堂(東京堂、大5)

○近世における列女伝—汪憲「列女伝」と安積信「列女伝」を中心として 山崎純一(早稲田大学中国古典研究二二、昭39・12)

あさかしん『安積信』いあさかごんさい(安積良斎)

あさかたんぱく『安積澹泊』(一六五—一七〇)。江戸時代、水戸の人。名は寛。字は子先。通称は寛兵衛。号は澹泊・老圃・常山・老牛居士。祖父の正信は元和元年(一六二〇)大阪の役に功があり、のち水戸侯に仕えた。父は貞吉(希斎)。澹泊は幼時から学を好み、十歳の

とき朱舜水に学び、三年に及んだ。最も史学に長じ、徳川光圀が大日本史を編修するに当たって、彰考館總裁となった。その学は程朱を宗としたが、それに拘泥することがなかった。能文で華音に通じた。明暦二年生、元文二年十月十日没、年八十二。著に澹泊史論三卷・朱子談綺三卷・舜水先生行実並略譜一卷・西山遺事五卷・烈祖成蹟二十卷・烈祖成蹟姓名考二卷・神祖遺事一卷・朱文恭遺事一卷・水戸唐儒話説一卷・湖亭涉筆四卷・老圃詩屢一卷・澹泊齋文集十八卷・澹泊齋筆記三十八卷がある。(近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覧・近世儒家人物誌)

【参考】○安積澹泊 岩橋遵成(近世日本儒学史下巻三三頁、東京宝文館、昭2) ○澹泊と白石 荒川久寿男(皇学館大学紀要一九、昭56・1)

あさかわかなえ 【朝川鼎】 ↓あさかわぜんあん(朝川善庵)

あさかわぜんあん 【朝川善庵】 一七六一―一七六九。江戸時代の人。名は鼎。字は五鼎。号は善庵・学古塾。儒者片山兼山の子。早く父をなくし、医家朝川黙齋に養われて、朝川を姓とした。折衷学派の山本北山に学び、ついで養父黙齋に伴われて京阪に至り、諸名家と交わった。のち寛政十年(一七九八)には長崎に遊び、また薩摩にも至って、学業が大いに進んだ。諸侯の贊を執るもの多く、中でも藤堂侯・松浦侯・大村侯など厚く賓師として礼遇した。嘉永二年二月七日没、年六十九。著に論語集説八卷・論語漢説發揮十卷・大学原本釈義一卷・孟子旁注一卷・周易愚説二卷・易説家伝記聞四卷・孝経定本一卷・孝経証注二卷・孝経五記・孝経六書・訂正孝経鄭氏注一卷・訂正孝経孔氏伝二卷・古文孝経私記二卷・古文孝経考異二卷・春秋内外伝八考一

卷・左伝諸注補考八卷・荀子箋釈八卷・荀子述・仁義略説一卷・濟時七策一卷・田園地方紀原二卷・鄭將軍成功伝一卷・楽我室集一卷・楽我室遺集二卷・楽我室詩文稿四卷・善庵隨筆三卷・善庵文鈔八卷・善庵詩鈔二卷・善庵遺稿三卷・善庵存稿一卷などがある。(日本教育史資料卷一一・三重先賢伝・事実文編六一・近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覧・漢学者伝記集成)

【参考】○朝川善庵 松下忠(江戸時代の詩風詩論 六三頁、明治書院、昭44)

あさかわどうさい 【朝川同斎】 一八四一―一八七〇。江戸

時代、加賀(石川県)の人。名は廣・慎。字は士修・永甫。通称は晋四郎。号は同斎・嘉遯・眠雲山房・小泉漁夫。加賀大聖寺藩士横江丈左衛門成美の子。江戸に出て書道家市河米庵の門に入り、塾僕となって、刻苦精勵、書道を修めた。二十五歳、朝川善庵の女を娶って婿養子となり、家学を研鑽すること数年、善庵に代わって諸生に教えた。また平戸藩に仕えて江戸邸学館に講説し、藩士子弟を教導した。実子なく、片山述堂の子尚綱を養子とした。安政四年十月二十二日没、年四十四。著に尚書古今文管窺二卷・眠雲札記二卷・文章書式一卷・紀效新書秘解・天正本孫子曹註輯補・征韓実記・山田長政通羅戦記がある。(近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覧)

あさひせんり 【旭千里】 ？―？。江戸時代、長門(山口県)の人。名は道一。字は伯貫。号は千里。大阪に住み、但徠学を修め、藤沢東咳(一七四一―一七六四)と交わった。生没年不詳。著に文章薫滴并二卷(日本芸林叢書)・非々物非々徴がある。(浪華人物誌・近世漢学者著述目録大成)

あさひなげんしゅう 【朝比奈玄洲】 ？―一七三四。江戸

時代、尾張名古屋の人。名は文淵。字は涵徳。通称は甚左衛門。号は玄洲・玉壺。荻生徂徠に学んで、漢籍に通じ、その姓名を書すに、まますい文淵をもってした。尾張藩に仕えて右筆となった。その著、客館瑠瑠集は享保四年(一七二九)朝鮮の使節申維翰と応接酬した詩文筆録を集めたものである。享保十九年一月十二日没。生年不詳。著に客館瑠瑠集二卷・蓬島遺珠前編一卷がある。(名古屋史要・漢学者伝記及著述集覧・近世漢学者著述目録大成)

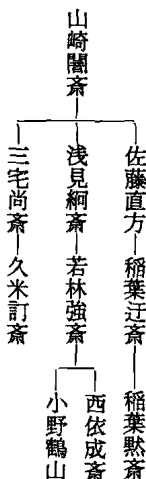
あさひななんざん 【朝比奈南山】 一六九一―一七三三。江

戸時代、河内(大阪府)の人。名は泰亮。字は君菜。通称は頼母。号は南山・拙斎。狭山藩に仕えて大夫となった。業を荻生徂徠に受けて詩文を善くした。明和九年六月二十九日没、年七十五。著に南山集一卷がある。(近世漢学者著述目録大成)

あさみけいさい 【浅見綱斎】 一六三三―一七二二。江戸時

代、近江(滋賀県)高島の人。名は安正。通称は重次郎。号は綱斎・望橋楼。初め医を業としたが、山崎闇斎を見るに及んで心服して儒学を学び、佐藤直方・三宅尚斎と共に崎門の三傑と称された。しかしのち闇斎の神道説に服せず、その教義内外説を反駁して破門となった。朱子学を主として名分論を唱え、靖献遺言を著して尊王思想を鼓吹し、慷慨気節を以て名があった。承応元年生、正徳元年十二月没、年六十。著に靖献遺言八卷・靖献遺言講義二卷・聖学図講義一卷・白鹿洞書院揭示集注講義二卷・氏族弁証一卷・西銘参考一卷・薛氏西銘諸説一卷・西銘講義一卷・歴銘考説一卷・教義内外説一卷・教義内外説師説一卷・程論性子諸説一卷・程子論性諸説師説一卷・中国弁一卷・楚辞

師説一卷・綱斎文集三卷・語録三卷・割録二卷・社會法師説・大学明德説一卷同講義一卷・中庸二十五章筆記一卷・論語筆記三卷・孟子浩然章講義一卷・易学啓蒙講義三卷・伏羲八卦圖講義一卷などがある。(近世漢学者著述目録大成・漢学者伝記及著述集覽) ↓せいけんいげん〔靖献遺言〕



【参考】 ○浅見綱斎と奥正尹 近藤啓吾 (東洋文化復刊四四・四五合併号、無窮会、昭53・8) ○浅見綱斎の研究 大久保勇市 (第一出版協会、昭13) ○浅見綱斎の楚辭観 斎藤護一 (斯文一七一・一一、昭10・11) ○浅見綱斎の格物論 坂井喚三 (斯文一八一・一〇、昭11・10) ○浅見綱斎の靖献遺言 法本義弘 (日本放送協会、昭15) ○浅見綱斎先生の学風 近藤啓吾 (斯文三三、昭37・3) ○浅見綱斎 岩橋遵成 (近世日本儒学史上巻二頁、東京宝文館、昭2) ○浅見綱斎 井上哲次郎 (日本朱子学派之哲学要旨頁、富山房、明38) ○浅見綱斎の人物と学業 糸賀国次郎 (海南朱子学発達の研究三頁、成美堂書店) ○浅見綱斎先生とその主張 佐藤豊吉 (文華堂、昭8) ○浅見綱斎の研究 近藤啓吾 (京都神道史学会、昭45) ○浅見綱斎先生年譜 近藤啓吾 (東洋文化研究所紀要四、昭37・12) ○浅見綱斎 侯野太郎 (朱子学大系一二、日本の朱子学、明德出版社) ○浅見綱斎の伝を調べて 近藤啓吾 (東洋文化復刊一、無窮会、昭37・5) ○浅見綱斎の大義名分論 坂井喚三 (近世日本の儒学、岩波書店、昭14)

あさみけいさいしゅう 【浅見綱斎集】 一冊。田

崎仁義の著。昭和十二年(一九三七)誠文堂新光社発行。

綱斎の著書数十種の中から三十七種を採録し、綱斎の国家および国体に関する思想、経済に関する思想などを解説したもので、第一章では綱斎の生涯および其の学系と皇政維新とについて述べ、第二章では華夷中外の弁および君位正統、南北正閏、臣道臣節、正朔と称呼などに関する綱斎の主張を説明している。

あじあれきしじてん 【アジア歴史事典】 十巻。下

中邦彦の編。昭和三十四年(一九五九)、平凡社発行。B5判、各巻四二〇〜四八〇頁。アジア関係の書名・人名・事項について解説している。なお、昭和五十九年(一九八四)発行の復刊本には、アジア歴史地図・東洋史料集成の二巻を加えている。

あじいけしゅうきょ 【味池修居】 二六九〜二七四。江

戸時代、播磨(兵庫県美郷郡奥吉川村稲田)の人。名は直好。幼名は松之助。通称は儀平。号は修居。長じて京都に出て浅見綱斎に師事し、のち三宅尚斎に学んだ。業成つて京都で学を講じた。享保十三年(一七三〇)五月、肥前(佐賀県)唐津藩主土井大炊頭に招かれて唐津に赴いたが、翌年辞して家に帰り、以後家居して仕えなかった。人となり簡黙重厚、名利に恬淡で忠愛の念に厚かった。元禄二年十月十八日生、延享二年八月十九日没、年五十七。著に南狩録三卷・三種神器不墮賊手論・子弟教誡・味池家系譜・朱子訓子帖別録がある。(近世漢学者著述目録大成)

【参考】 ○味池修居事歴 岡彪村(南狩録付載) ○南狩録の著者味池修居小伝 川島末舟(伝記三一八、昭11) ○味池修居先生 伝記学会(山崎闇斎と其門流三三頁以下、明治書房、昭13) ○最近に於ける崎門

学者の業績 近藤至(斯文二一六、昭14・6)

あしかがえんじゅつ 【足利衍述】 ↓あしかがきん

どう(足利欽堂)

あしかががっこう 【足利学校】 下野国足利(栃木

県足利市)にあり、室町時代の中期ごろから名があらわれた。初め学校として盛名があったが、のちにはむしろその文庫に蔵する書籍によって名を得た。創設者

については諸説があり、小野篁とするもの、藤原秀郷の曾孫が建立したとするもの、国学の遺制であるとす

るもの、足利義兼が創設したとするものなどがあつて一定しない。ただ学校が足利庄の領主足利氏と不可離な関係にあると考えられるのからは、義兼説が有力であるいは足利氏の子弟教育のための氏が、その前身とも考えられるが確証はない。学校は応永(一三六四〜一四一三)のころ盛んであつたが、その後は衰運に向か

った。永享(一四四一〜一四四六)年間、上杉憲実が鎌倉管領となり、また足利庄を管理するに及んで、その衰微を憂え、学田を寄付したり、書籍を納めたりして再興につとめ、僧快元を院主(校長)として管理教授の任に当たらせた。その盛んであつたことは、鎌倉大草紙に「此比(此)諸国大に乱れ学道も絶えたりしかば、此所日本一所の学校となる。是より猶以上杉安房守憲実を諸国の人も褒ざるはなし。西国北国よりも学徒悉く集る」と見えている通りである。その後、北条氏・武田氏の保護を得て徳川時代に至り、明治維新後は藩主の戸田忠行が再興して教育を再興したが、廃藩後は栃木県の管理となり、その後、足利市の所管となつた。

文安三年(一四四六)上杉憲実が制定した校則には「三注(千字文集注・古注蒙求・胡曾詩注)・四書・六経・列(列子)・莊(莊子)・老(老子)・史記・文選外、

於「学校」不可講之段。為旧規之上者、今更不及「禁之」とあって、經史子集にわたって教授したことが知られるが、易学において特に異彩を放ち、注釈は古注を主として新注をとる新古折衷主義がとられた。

【参考】○足利学校の研究 川瀬一馬（講談社、昭23）○林家と足利学校 福井保（長沢先生古稀記念図書論集、三省堂、昭48）○足利学校沿革誌（足利学校遺蹟図書館、昭7）○足利学校遺蹟図書館漢籍分類目録（足利市役所、昭41）○足利学校 足利衍述（鎌倉室町時代之儒教六頁、有明書房、昭45復刻）○足利学校 久保天随（日本儒学史、博文館、明37）○足利学校と金沢文庫 岩橋道成（日本儒教概説、大14）○金沢文庫と足利学校 平泉澄（中世に於ける精神生活）○足利学校 小野則秋（日本文庫史、昭18、日本文庫史研究上、昭19）○足利庄の文化と皇室御領 八代国治（歴史と地理二一五）○足利学校の所在及創設に就て 藤岡繼平（歴史地理二一七）○足利学校の盛時と西教宣伝 新村出（史林四一四、また南蛮広記）○足利学校の沿革を徵すべき古文書 大森金五郎（史林四六一四）○足利学校立石正路（南学史二四頁、富山房、昭9）○足利学校の研究について 斎藤勝雄（淑徳短期大学研究紀要一六、昭52・3）○足利学校と大内文学 武藤長平（斯文一九一〇、昭9・10）○足利学校 塩谷温（斯文二二一六、昭15・6）○足利学校新論 和島芳男（神戸女学院大学論集八一・一二）○足利学校蔵書の集散について 長沢規矩也（書誌学復刊一・三・六・九、昭42）○足利学校の研究 藤岡繼平（国学院雑誌一六一・二・五・八）○足利学校と宋学 西村

天因（日本宋学史二四頁、梁江堂書店、明42）○足利学校と新文芸 西村天因（同上）○足利学校秘本書目 長沢規矩也（日本書誌学会、昭48）○足利学校貴重特別書目解題 長沢規矩也・川瀬一馬（昭12）○足利学校善本図録 長沢規矩也編（足利学校遺蹟図書館後援会刊、昭48）○足利学校に関する文献の研究 須永弘（岩下書店（足利市）、昭12）

あしかががっこうえんかくし 『足利学校沿革誌』

栃木県足利市昌平町の足利学校遺蹟図書館の編並びに発行。大正六年（一九一七）七月初版で、昭和十一年（一九三六）五版が出ている。小形本で二四頁。足利学校の沿革について、創立・位置・沿革・聖廟・積奠・圖書に分けて記している。ちなみに足利学校の創立については諸説があるが、本書は小野篁説をとり、「今文獻ノ稍微スベキモノノミニ拠リテ之ヲ断ズレバ上古ノ国学荒廃セルニ当リ小野篁其故跡ニ就キ更ニ学校ヲ創立シタルモノト謂フヘシ」と言っている。

あしかががっこうき 『足利学校記』 写本一卷。足

利学校の記で、巻首に聖廟の図を掲げ、そのあと漢文で学校の状況を記し、次に蔵書の目録を挙げている。

慶長四年己亥（一五九七）の跋がある。

あしかががっこうけんぶんき 『足利学校見聞記』

江戸時代の広瀬旭莊の著。天保十四年（一八四三）九月十八日から二十日まで見聞した蔵書のことなどを記している。この書はもと東京神田の松雲堂主人が足利紀行と題する一抄本を入手し、それが旭莊の日間瑣事備忘の断編であることを知って、大正十二年（一九三三）倉石武四郎博士の識語を付し、足利学校見聞記と題して刊行したもの。

あしかががっこうじせきこう 『足利学校事蹟考』

川上広樹の著。明治十三年（一八八〇）八月発行。足利学校の沿革を考証詳述し、編末に賛主の略譜と、その後の沿革を録し、付録に足利学校聖廟祭祀に関する記事を載せている。

あしかががっこうぞうしよもくろく 『足利学校蔵書目録』 写本一卷。新案定の著。足利学校の蔵書

を儒・仏・和・医の四門に分けて列載している。寛政九年丁巳（一七九七）九月の凡例がある。

あしかががっこうちんしよもくろく 『足利学校珍書目録』 足利学校遺蹟図書館の編並びに発行。

大正八年（一九一九）十二月初版。小形本、四二頁。同館の蔵書二万六十一冊中、珍書と認められる古文尚書（古写本）以下五百七十六冊を選び、簡単な説明を加えている。

あしかががっこうのけんきゅう 『足利学校の研究』 川瀬一馬の著。増補新訂版。昭和二十三年

（一九四八）、講談社発行。足利学校についての総合的な研究書で、内容は次の通りである。第一章Ⅱ足利学校の創設―第一節上杉憲実関与以前の足利学校・第二節上杉憲実の学校建設・附、上杉憲忠並びに憲房の学校援護。第二章Ⅱ室町時代における足利学校―第一節室町時代の文獻に見えたる足利学校・附、西教徒の記録に現れたる足利学校・第二節室町時代における足利学校の所在地・第三節室町時代における歴代座主の事蹟・第四節室町時代における足利学校・第五節室町時代における足利学校の蔵書・附、足利学校の蔵書印・第六節室町時代における足利学校の学風。第三章Ⅱ室町時代における足利学校の教学目的とその存在意義。第四章Ⅱ慶長時代における足利学校―第一節慶長時代における足利学校出身者の活動・第二節第十世座主兼松と